

編集後記

近々の「週刊新潮」(二〇〇九年四月二日号)に「何が純文学だ!」と激怒した「巨匠」松本清張の素顔」という記事が掲載されている。執筆は新潮社の元担当編集者・須賀契子。普段、週刊誌を買うことはほとんどない私であるが、電車の中吊り広告に惹かれてつい購入してしまった。

内容は、多くの連載をかかえる清張から原稿を取るために奔走する担当編集者が見た「国民的作家」の素顔といった趣。「純文学」なるもののへの憎悪、古代史の専門書へのクレーム、自著の解説や装丁への拘りといった編集者泣かせの一面にはじまり、長年にわたって正規の印税とは別に「機密費」が支払われていたことを暴露するゴシップへと下落していくわけだが、さすがに身近に接していた編集者ということで、それぞれの話題には迫真性があり読ませる。

だが、この記事にはどこか自己顕示の匂いがする。連載小説を単行本化するにあたって、若手編集者である執筆者が清張に訂正や削除を依頼する場面での、「私が調整できる個所は全部私の手で行う、布石として書かれて後に不要となったシーンなどは削除、重要な部分にのみ手を入れて頂く。この方式でゲラにして持参した」といった記述をみると、私が「国民的作家」の仕事を影で支えていたとでも言いたいのだろうかと思ってしまうのである。

こんなことを「編集後記」に書いたのは、本誌に寄せられた恩田雅和「天満天神繁昌亭の成立と展開」のなかに前記ゴシップとは正反対の姿勢を感じたからである。大阪天満宮に誕生した落語常設小屋・繁昌亭の設立経緯、運営、現状などをリポートするこの文章には、最後の最後に「恩田雅和」という支配人が登場し着任の経緯が記されている。多くの執筆者なら無意識のうちに「私」と書いてしまうところを、氏は「恩田雅和」で貫き、しかも、個人的な感慨や理想はいっさい封印したまま事実だけを淡々と(しかも簡潔に)記録する。

「大衆文化」を研究・リポートするためには、当然のことながら、ある問題に関心をもち、活字として残しておかなければならない貴重な資料だと判断する「私」の主体性を明確にする必要が生じる。「私」の主体性が感じられない研究・リポートが面白いはずはない。だが、それは自己顕示とは決定的に違っている。むしろ、可能な限り「私」を抑制し、対象となるテーマや資料を高性能レンズのように微細に捉えていくことによって、はじめて探究する主体が浮かび上がるのである。本誌は「大衆文化」に関わるありとあらゆるテーマを対象とし、自由投稿(しかも年中受付)を原則として編集される。多くのみなさまからの投稿こそ本誌の活力である。今後も多くの玉稿を乞いたい。

(石川 巧)